第3回POPコンテスト

弘前大学附属図書館では、図書館の利用促進や読書推進を目的として第 3 回 POP コンテストを開催いたしました。今回は 26 点の POP 応募があり、作品は全て該当図書と共に館内特設ブースに展示されました。そして、一般利用者を含む図書館利用者からの投票、および専用投票 Web ページからの投票によって、全 6 作品の入賞が決定しました。

表彰式は 11 月 15 日（水）に附属図書館本館にて行われ、それぞれの受賞者に郡館長から表彰状が手渡されました。

今回は特徴的な色使いの POP で『りんごをアップルとは呼ばせない』（黄孝春，平本和博著）の魅力をアピールした人文学部 4 年・藤村光さんが大賞を受賞し、目を引くイラストとキャッチコピーで『「学力」の経済学』（中室牧子著）を紹介した人文学部 4 年・澤田悠祐さんが優秀賞を受賞しました。その他 3 名の方が、それぞれ工夫をこらした POP で佳作を受賞しました。

また、今回もサンライズ産業株式会社様にご協賛いただき、特別賞としてサンライズ産業㈱賞を設けました。サンライズ産業㈱賞は、POP にこぎん刺しの模様を縫いこみ『ことりっぷ　弘前 ： 津軽・白神山地』を紹介した教育学部 1 年・小池亜摘さんが受賞し、（サンライズ産業㈱）工藤代表取締役から表彰状が手渡されました。

受賞者からは、「まさか自分が受賞するとは思っていなかったので嬉しい」という喜びの声や、自分が POP で紹介した本がどんなに魅力的な本なのかが語られました。

受賞者の皆さん、誠におめでとうございます。来年度も引き続き POP コンテストを開催する予定ですので、学生の皆さん、ぜひ応募してください。

（情報サービスグループ　　本多　高穂）

郡館長（前列右）、サンライズ産業(株)工藤代表取締役（前列左）と受賞者

大　　賞

人文学部４年　藤村　光さん

『りんごをアップルとは呼ばせない ： 津軽りんご人たちが語る日本農業の底力』

今回、はからずも大賞をいただきましたこと、大変うれしく思います。私がこのような喜びを得ることができましたのは、アドバイスや投票をしてくださった方々、企画運営に携わられた図書館の方々、協賛企業様のおかげです。本当に心から感謝を申し上げます。

私はりんごが大好きで、図書館で「りんごをアップルとは呼ばせない」を見た時に、りんご≠アップルとはどういうことだろう、とタイトルに興味を持ちこの本を手に取りました。この本には、日本、特に青森のりんご産業の歴史や概要が分かりやすく書かれています。また、関係者の人たちの生の声もたくさん載っていて、りんごを作っている人たちの強い思いやこだわり、そしてその魅力について知ることができ、とても面白いです。この感動をより多くの方々に知っていただきたいと思い、POP を作るのは初めてでしたが「りんごをアップルとは呼ばせない」で応募しようと思いました。

POP のポイントは、大きく 2 つあります。1 つ目は、りんごを背景にしつつ、文字も少なくし、シンプルにしたことです。2 つ目は、農家が生き残っていくために、りんご（ジュース含む）の海外輸出において様々な工夫をしてきたという一連の流れを戦争に見立てて「青森 VS 世界」と表現したことです。少しでも、POP や本の内容に興味を持った方は、是非読んでみてください。

優　秀　賞

人文学部４年　澤田　悠祐さん

『「学力」の経済学』

この度は『「学力」の経済学』で優秀賞をいただけたこと、とても感謝しております。投票してくださった方々、ありがとうございました。

私がこの本を薦めたいと思った理由は、弘大生が将来的に根拠に基づいて子供を教育するようになってほしいと思ったからです。私自身、「ゲームをするな！」と親の言うことが絶対だと思って教育されていましたが、それは親の主観であって学問的に何か根拠があるわけではありません。実際にこの本でもゲームをやめさせても勉強するようにはならないと書いています。子供は「自分で調べて考える」という能力を持つ前は、親や家族が絶大の権力者になります。無知な子供に対して教育する際には親自身がしっかりと学ぶ必要性があると感じていたので、この本で POP を書こうと思いました。毎年 POP コンテストに応募される POP は繊細で、画力があるものが受賞すると思っていたので、逆に目を引くようなイラストとキャッチコピーで仕上げました。

最後に、私の POP を見てくださった方々、企画運営に携わられた図書館の方々、協賛のサンライズ産業株式会社様に深く感謝します。ありがとうございました。

サンライズ産業(株)賞

教育学部１年　小池　亜摘さん
『弘前 ： 津軽・白神山地』

私が「ことりっぷ　弘前：津軽・白神山地」でこの POP コンテストに応募したきっかけは、私が大好きな弘前の魅力を、もっと多くの方に知ってもらいたいと思ったからです。そのため、今回この賞をいただくことができて本当に嬉しかったです。

私がこの本に出会った時、まず初めに惹きつけられたのは表紙のデザインでした。POP を作る時に、本の内容はもちろんデザインの魅力も伝えたいと思い、色合いや、文字の雰囲気を表紙にあわせて制作しました。この本の表紙で特徴的なのは、津軽地方の伝統工芸であるこぎん刺しの模様なので、POP にも実際に糸を使い、こぎん刺しの図案の模様を縫い付けてみました。今までこぎん刺しの経験は学校の授業で教わったほどしか無かったので、なかなか上手くいかず苦戦しましたが、紙と違う素材を生かすことでこの本のあたたかみのある雰囲気を伝えられたと思います。

私はこの本を県外から来た方はもちろんですが、弘前出身の方にこそ読んでほしいと思っています。私も弘前出身なのですが、この本には自分が今まで知らなかったお店や、行ったことのない観光地など魅力的な弘前がたくさん紹介されていました。今回の POP を見て、より多くの方にこの本を手に取っていただけたら嬉しいです

佳　　作

人文学部３年　高森　勇汰さん
『ハリー・ポッターと秘密の部屋』

コンテストに応募しようとしたきっかけは、図書館でアルバイトしていることもあり、いつもそのチラシを目にしていて興味を持ったからです。また、ハリーポッターの１作目ではなく、２作目にした理由は、前回の POP コンテストで１作目を書いたということもありますが、２作目のほうが自分的にストーリーが好きで、内容が入ってきやすかったからです。

自分はすごく絵が下手で、今回の作品も全然うまくかけておらず、少し提出するのが恥ずかしかったというのが本音です。実際、提出してみてもほかの人たちの POP が上手すぎて自分の作品がどう見ても浮いているのが目に見えてわかりました。絶対入賞はないと思っていました。しかし何度か、自分の作品への投票の途中経過を見に行っていると、思った以上に票が入っていて驚きました。そして、結果を見ると自分の作品が入賞していて、驚きと同時に嬉しさがとてもありました。今まで、絵で賞を取ることはなく、今回が初めての経験だったので、とてもいい経験になりました。

佳　　作

教育学研究科１年　田　露さん

『愛しのオクトパス：海の賢者が誘う意識と生命の神秘の世界』

この度は、POP コンテストの佳作にお選びいただき、誠にありがとうございます。皆さんの素敵な作品を見て、賞は自分に縁のないものと思っておりましたので、授賞の通知を受けて、驚きました。『愛しのオクトパス―海の賢者が誘う意識と生命の神秘の世界』という本はタコほど人間とかけ離れた動物はそうそういない――タコについて専門的な知識もほとんどなかった著者が、ある日ボストンの水族館で１匹のタコと出会うという物語です。この本は外国人の私にとっても非常に読みやすくて、面白い本です。

POP デザインについては、可愛いらしいタコを描きました。タコは深海に住んでる怖い物ではなく、魂を持ち人間と変わらない生き物です。読者にもっと本の内容を理解させる為に、コピーは

｛ タコは三つの心臓が脈打っている。　タコは自分の考え方がある。
　タコはユーモアがわかる　タコは命の最後に恋をする　　タコのハグは世界一
　タコは人間と同じ魂を持っている。 ｝を使いました。

POP を通じて、たくさんの方に読んでいただければやりがいを感じます。本当にありがとうございました。

佳　　作

教育学部２年　色摩　優希さん

『明日この世を去るとしても、今日の花に水をあげなさい』

『明日この世を去るとしても、今日の花に水をあげなさい』－明日死ぬのに、なぜ他のものに目を向けなければいけないのか？－ふと、そんな疑問が脳裏をよぎり、やがてそれはこの本を読んでみたいという感情に変わっていきました。いざ読み進めていくと、自分の中にあった不安定な土台が崩壊し、頑丈な土台が形成されていくような感覚を覚え、是非この本を他の人と共有したいと思いました。

POP を作るにあたって、どうすればこの死生観を題材にした自己啓発本を他の人にも読んでもえるのか悩みました。悩んだ挙句、僕は本を読む前の自分の姿を描くことに決めました。カオナシです。自分が何をしたいのかわかっていないカオナシは、人生の役割や使命がよくわかっていなかった自分に重なったのです。今、僕と似たような状態にある人には是非この本を読んでほしく、カオナシのイメージがそういう人たちに何か訴えかけることができれば幸いです。

最後に、企画運営をしてくださった附属図書館関係者並びにサンライズ産業(株)の方々本当にありがとうございました。また、この POP に投票してくださった方々にもお礼を申し上げます。